
漢陽の中心だった朝鮮王朝第一の法宮

景福宮は1395年に創建した朝鮮王朝第一の法宮(王の住む宮廷)である。北には北岳山が、南には正門である光化門があり、その前に広い六曹通り(今の世宗路)が開かれた漢陽(ソウル)の中心だった。後に拡張と再建を繰り返えす中、1592年の文禄の役の際、全焼してしまった。その後、景福宮は約270年間復旧されることなく放置されていたが、1867年に高宗(26代目の王)の実父(興宣大院君)の主導で再建された。再建された景福宮には、約500棟の建物があった。宮廷には基本的に王と役人たちが政務を担当する外殿、王族と宮人たちが生活する内殿、休息のための庭園施設などがあった。

景福宮は日本の植民地時代、計画的に毀損された。1911年に景福宮敷地の所有権は朝鮮総督府に移り、1915年には朝鮮物産共進会を開催するという名目で90%以上の殿閣が取り壊された。1926年には巨大な朝鮮総督府庁舎が建てられ、景福宮の建物は見えなくなった。

景福宮は1990年から本格的な復元事業を推進している。昔の朝鮮総督府の建物を撤去して興礼門一帯を復元し、2010年には正門の光化門を復元した。

景福宮の名称 景福宮は朝鮮王朝が成立して3年後の1395年に完成された。その数日後に、開国功臣の鄭道伝は、太祖(1代目の王)の命に従って景福宮という宮廷の名を含め、康寧殿・延生殿・慶成殿・思政殿・勤政殿等の主要殿閣の名をつけた。景福宮という名前には「新しい王朝が大きな福を享受して繁栄する」という意味が込められている。

文禄の役と景福宮の火災の原因 景福宮は文禄の役により、全焼されてしまった。『宣祖修正実錄』には、王室と臣下たちが避難のためソウルを発つと、怒りをおぼえた民衆によって「都城が燃えた」という1592年4月30日付けの記事が載っている。これとは異なり、『宣祖実錄』5月3日付けの記事には、日本軍の動態を記述しながら、「この時、王宮が燃えた」となっており、景福宮の火災の時点と原因について食い違う記録を見せている。当時の日本人、尾崎の『朝鮮征伐記』5月3日付けには「是れこそ殿閣を熱と見るに城闕雲に聳え、樓臺玉を瑩め其綺麗なる有様、秦宮の壯麗を摸し」と書かれており、日本軍が入って来る前には宮廷が保存されていたという記録が残っている。当時の状況と文献資料に基づいて見ると火災の原因是民衆ではなく、日本軍に捜すのがより説得力があるといえる。

1 光化門と宮廷の石垣

光化門

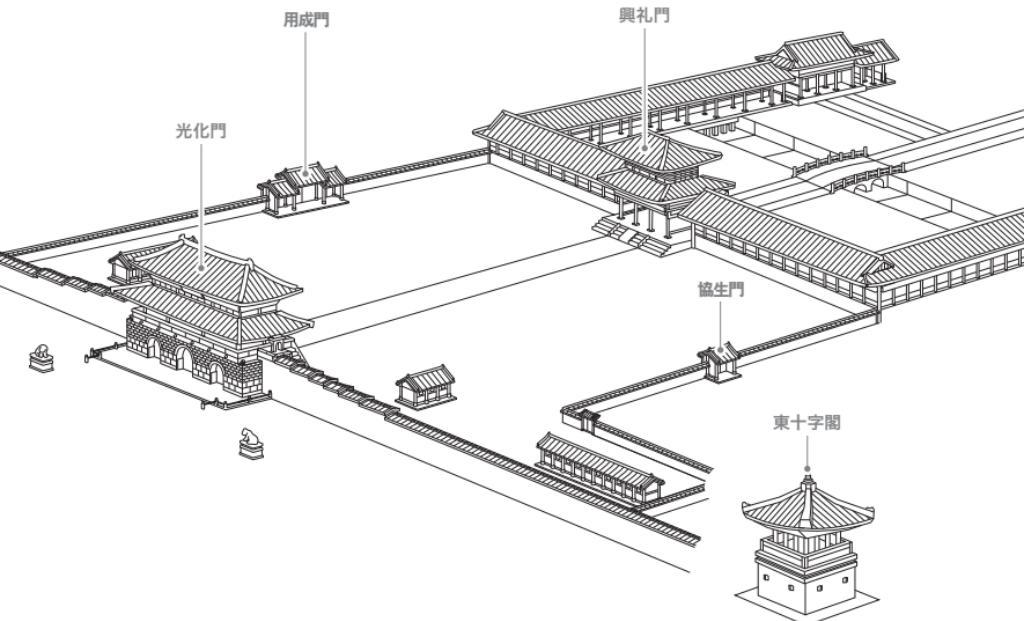
昔の栄華を思わせる4大門

景福宮を囲む石垣の長さは2,404mに達し、高さは平均5m、厚みは2m程度だ。石垣の四方には4つの大門を作り、1426年(世宗8年)に建春門(東)、光化門(南)、迎秋門(西)、神武門(北)と名付けた。これはそれぞれ春ー夏ー秋ー冬と木ー火ー金ー水を象徴し、真ん中に位置する勤政殿を中心に四方を取り囲んでおり、伝統的な五行説に由来した名称だ。景福宮の正門である光化門の両端の角には望桜である東十字閣と西十字閣を建てて、朝鮮の5大宮廷のうち、唯一、闕門形式を備えている。西十字閣は1920年代に撤去された。東十字閣は道路拡張によって石垣が内側に縮小され、道路の真ん中にはぽつりと立つようになった。





光化門の受難と復元 日本は朝鮮総督府の庁舎が完成すると、景福宮の顔と言える光化門を無くそうとした。しかし甚だしい反対世論にぶつかり、景福宮の東門である建春門の北側に移した。その後、朝鮮戦争の時に爆撃で基壇部だけが残り、壊れたものを1968年に鉄筋コンクリートで再び作ったが、当時の道路と周辺建物の軸に合わせたため、元々の姿や位置とは違っていた。2006年にこれを撤去し、再び復元工事を始め元来の姿と位置を取り戻すようになった。2010年に復元完了した。



六曹通りに立っていたヘッテ像 今は光化門の左右に近い距離を置いて座っているヘッテ像だが、朝鮮時代には光化門から約80m離れた所に立っていた。六曹通りとは、当時の光化門の前に朝鮮の中枢的な官署が立ち並んでいたことから付けられた名前だ。

想像の動物である‘ヘッテ’は、正しくない事をした人に飛びかかって角で刺し突くという靈物として知られている。1890年代の写真を見ると、‘ヘッテ’像の前に‘L’字模様の石が置かれているが、これは王より地位の低い人は、ここで乗り物から降りろという下馬の表示だった。‘ヘッテ’像から光化門までは老若男女を問わず、歩いて行ったのだ。

2 勤政殿一帯

勤政殿

儀式・国家行事が行われた宮廷の中心

勤政殿は景福宮の最高殿閣である法殿(正殿)で、その名前は‘天下の事は勤勉であれば治まる’という意味を持っている。宮廷で最も莊厳な中心建物として王権を象徴し、王の即位式や文武百官との朝会、外国使節の接見など国家行事を行った所だ。1926年に勤政門外側の領域は取り壊され、そこに朝鮮総督府庁舎が建てられた。2001年に興礼門と永濟橋等を復元して元の姿に取り戻した。勤政殿は韓国の国宝第223号、勤政門は宝物第812号に指定されている。



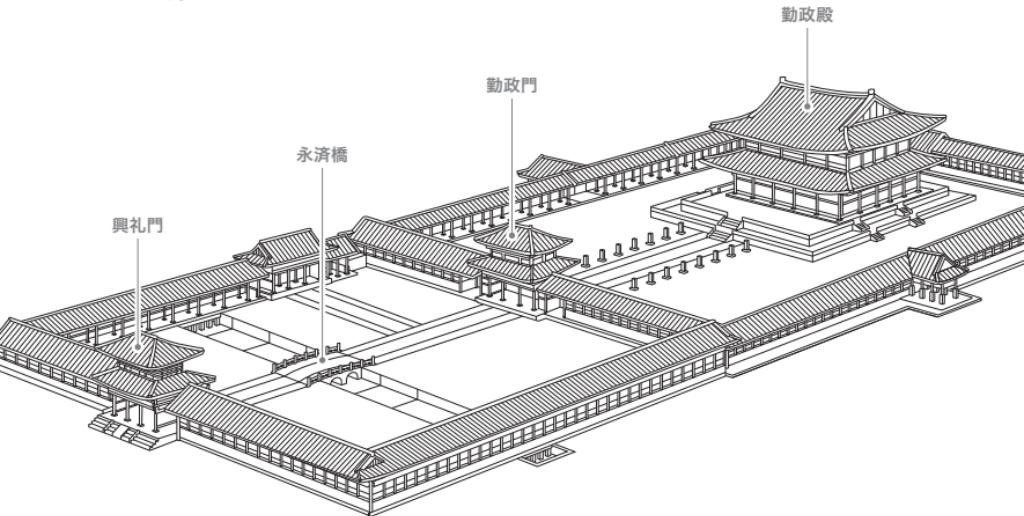


朝廷と品階石、金属の環 勤政殿の庭先、即ち朝廷に敷かれている薄石(石畳み)は日光による眩しさを減らすために、わざと荒く削ってある。朝廷の真ん中に周辺より少し上っている道は御道といい、王だけが通ることができる道だった。御道の左右には臣下たちが階級別に並ぶための品階石を立てた。勤政殿の柱と朝廷の薄石に丸い金属の環がはめ込まれているのが見える。これは王と官員たちが朝廷に集まっている時、日光や雨を遮る天幕を張るのに使ったものだ。

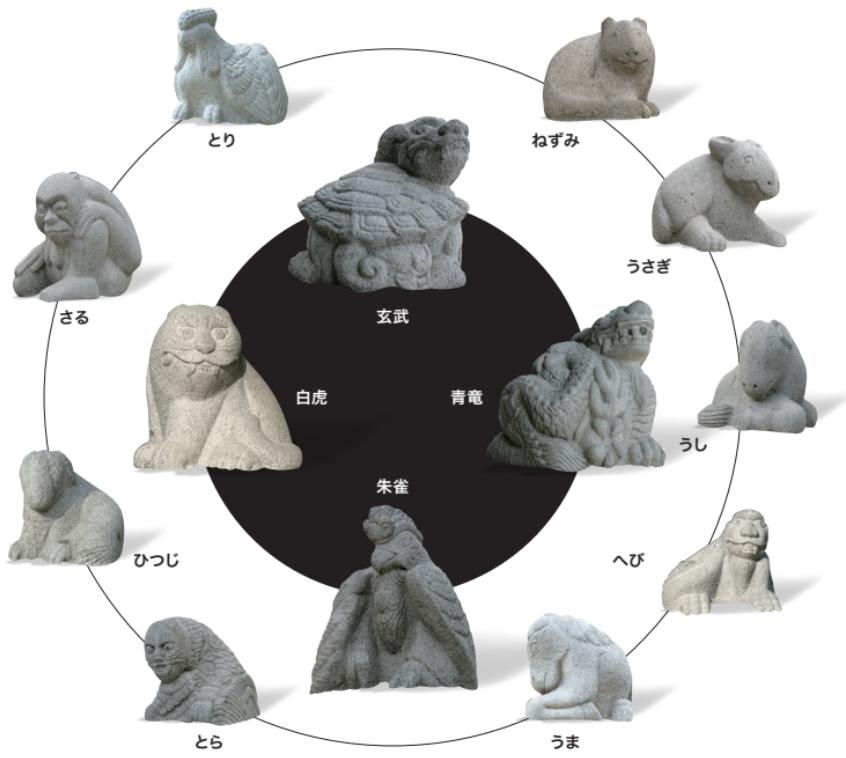
勤政殿で開かれる朝会 勤政殿ではソウルに居住する文武百官が参加する朝会(会議)を一月に四回開いた。朝会には微官末職も官服を着て皆参加した。朝廷には階級別に並ぶための品階石が立っているが、この前で臣下たちが敷いて座る座布団も階級によってヒョウ皮・虎皮・羊皮・犬皮と差等をつけた。



永済橋のサネ



軒下の網と五支槍の用途 勤政殿の軒下の外側に網のようなものがあるが、これを“ブシ”という。鳥の侵入を阻むために昔から使用していたものだ。鳥の排泄物は美観上も良くないが、強い酸性のため木造建物である宮廷に悪い影響を与えるからだ。回廊などの網をかけにくい所には五支槍をさして鳥がとまるのを防いだ。



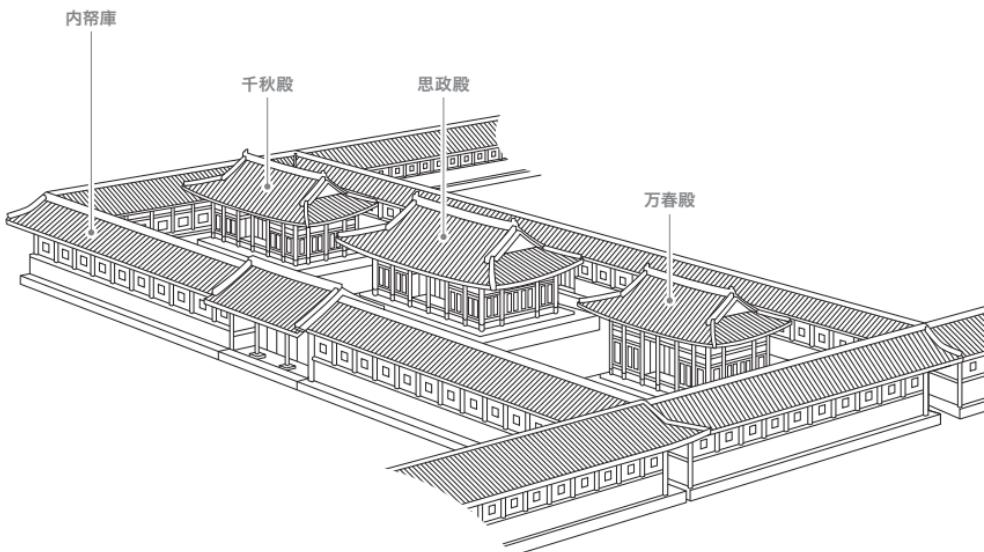
月台の構成と施設物 勤政殿は二段の月台上の上に欄干をかけて青竜、百虎、朱雀、玄武の四神と、十二支等を彫刻して置いた。これは勤政殿の位相と格式を表すものだ。動物像は勤政殿と王室を守る靈妙な動物たちであり、民話によく見られる滑稽と親しさ、人間味が感じられる。基壇の左右の両端には香炉がある。これは青銅で作ったもので国家行事のときに使われた儀器である。宮廷の主要殿閣に平たく大きい釜‘ドゥム’を設置し、その中に水を入れて置いた。天の火魔がその水に映った自分の顔を眺めて驚いて逃げるようにして火事が起こらないことを願うという意味だと伝えられている。

3 思政殿一帯

思政殿

国政が行われた所

思政殿は王の公式的な執務室で、その名前には王が政治に臨む時、深く考えて正否を選び分けなければならないという意味が込められている。毎朝の報告と会議、国政セミナーにあたる行事などがここで開かれた。思政殿の左右にある万春殿と千秋殿は、オンドル部屋を取り揃えて冬でも利用できた。万春殿は朝鮮戦争で焼失したものを1988年に復元した。思政殿の前の倉庫は王室の財物を保管する所として利用した。思政殿は宝物第1759号に指定されている。



常参を一日も欠かさなかった世宗(4代目の王)　思政殿では毎日明け方3~5時の間に‘常参’という閣僚会議が開かれた。世宗は過重なスケジュールにもかかわらず一日も欠かさずに常参に参加したという。常参は燕山君の時に一時廃止されたこともある。

4 康寧殿と交泰殿

康寧殿・交泰殿

王室の生活が息づいている所

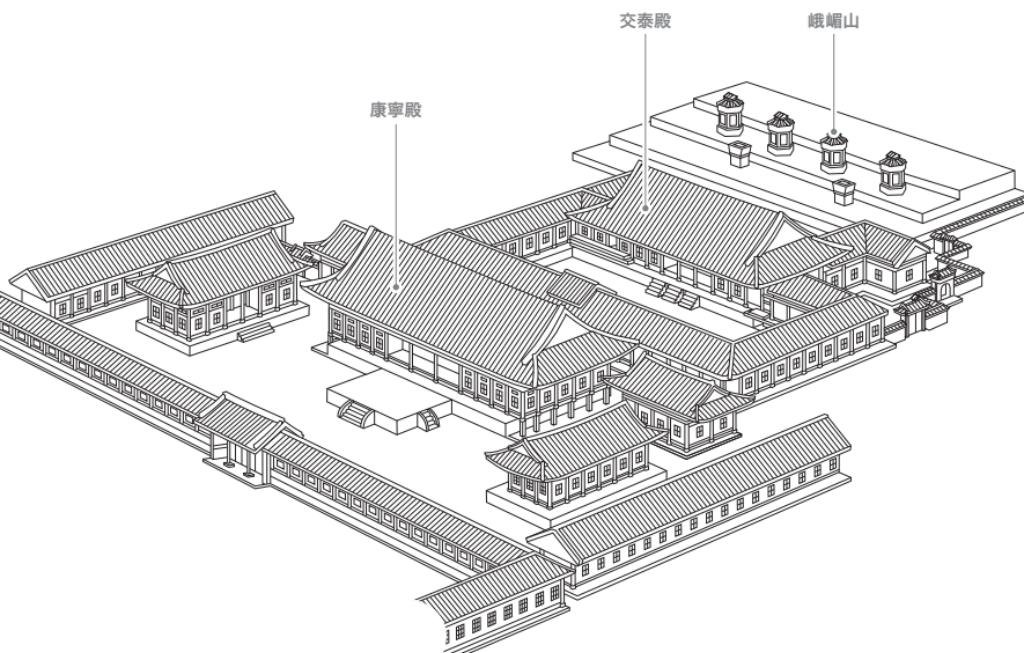
王と王妃が日常生活をする所を寝殿と言う。康寧殿は王の寝殿である。寿・富・康寧・攸好徳(徳を好み、喜んで行うこと)・考終命(寿命のとおりに生きて楽に死ぬこと)という五福の中で真ん中の三番目の福が‘康寧’である。王はここで読書と休息など、日常生活だけではなく臣下たちと政務を執ったりした。

交泰殿は創建当時ではなく1440年(世宗22年)に初めて建てられた。ここは王妃の寝殿で宮廷内の生活を総指揮した所だ。





交泰殿の後ろには峨嵋山という王妃の後園がある。慶会楼の池を掘る時に出た土を利用して作った階段式花壇とそこの煙突が美しい。この煙突は韓国の宝物第811号で地下に煙道がある。1917年に昌徳宮の寢殿が焼失すると、日本は木材を調達するといって康寧殿と交泰殿を取り崩して昌徳宮の熙政堂と大造殿を作るのに使用した。現在の康寧殿と交泰殿は1995年に復元したものだ。



両儀門を軽くした理由 交泰殿という名前は、周易の原理に触れている。交泰殿の入り口である両儀門の‘両儀’は陰陽を意味し、‘交泰’は天と地が交わるという意味である。王と王妃が子孫をたくさん生むことを願う名前であるのだ。両儀門は康寧殿の大門である櫻五門と異なる点がある。櫻五門は純重なのに比べて、両儀門は軽くなっている。交泰殿は女性たちの宿であったため、女性たちが苦労しないで開閉できるようにした気配りが読みとれる。

殿下と中殿の語源 私たちが一般的に王の呼称として理解している‘殿下’は、宮廷の殿閣と関連のある言葉だ。‘殿下’は殿閣の下で伏せて仰いで見るという極尊称で、‘○○殿’に暮らす王や王妃に付けるのだ。王妃の寝殿は宮廷の真ん中にあり、宮廷生活の中心になる所であるため‘中宮殿’といって、王妃のことを‘中宮ママ’または‘中殿ママ’と称した。王世子が暮らす所は内殿の東の方に配置し、その建物と王世子のことを‘東宮’と呼んだ。

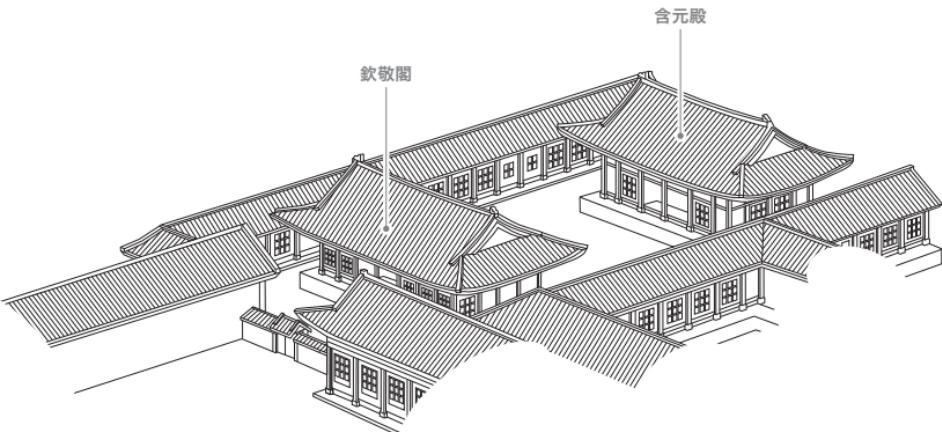
5 欽敬閣と含元殿

欽敬閣・含元殿

王室の必要によって内殿の近くに作った建物

欽敬閣は農業発展のために天体の運行を理解して時間を精緻に測定しようとした王の苦心と努力が込められている建物だ。世宗は1438年に欽敬閣建設を命じて、ここに玉漏機輪・仰金日晷などの時間測定機器と天文観測装置である簡儀を作つて設置した。

交泰殿の近くに位置し、主に仏事を行った含元殿も世宗の時に建てられたと推定される。朝鮮王朝は儒教国家だが、世宗など多くの王と王妃が仏教に心酔していたという記録が実録に残っている。何回かの焼失を経て1888年(高宗25年)に復旧されたが、景福宮の他の内殿と同じく1917年の昌徳宮大火災以後、昌徳宮再建のために取り壊された。現在の建物は1995年に復元したものだ。



仰金日晷は日時計、玉漏機輪は水時計 蔣英實が1434年(世宗16年)に作った仰金日晷は単に時間だけを知らせるのではなく、針の影の端を見れば時間と節気が同時に分かる多機能時計だった。仰金日晷が半球模様になっているのを見ると、当時の学者たちは太陽の動きを正確に読み、地球が丸いということを認識していたことが分かる。玉漏機輪は日時計の短所を補った自動天文水時計だ。水の流れによってさまざまな人形が時刻に合わせて正確に動きながら木魚、太鼓、どら(銅鑼)、鐘を自動的に打つように作られていた。

6 慈慶殿一帯

慈慶殿

興宣大院君が捧げた大妃殿

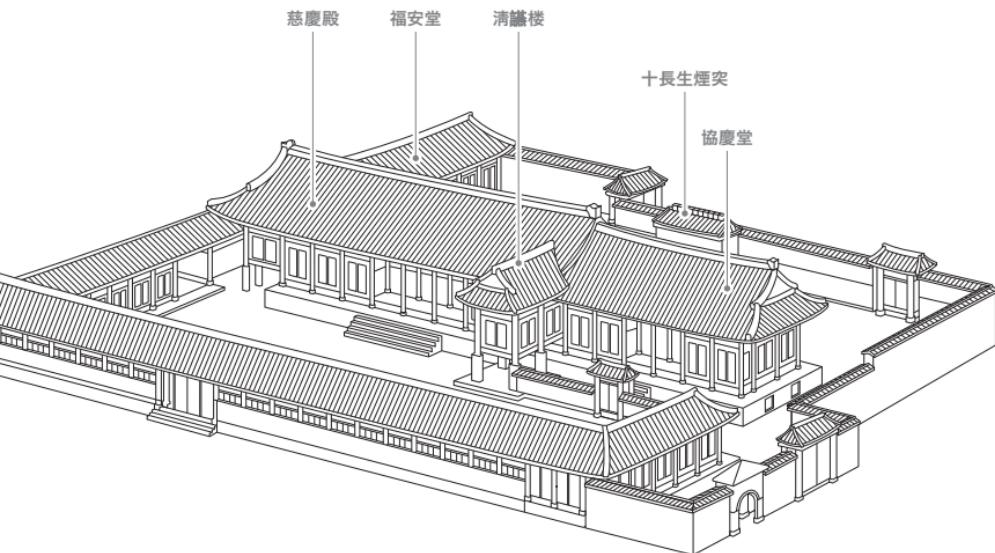
憲宗(24代目の王)の母君である神貞王后は高宗(26代目の王)の即位に決定的な寄与をした人物だ。高宗の実父である興宣大院君は神貞王后的居所を宮廷内でも最も華やかで細やかに作り、その恩に報いた。‘慈慶’という名前は正祖(22代目の王)が即位して母君である惠慶宮洪氏のために昌慶宮に慈慶堂を建てたことから始まった。王が母君に慶事があることを願うという意味である。二度の火災で焼失後、1888年に再建して景福宮寝殿のうち唯一残っている昔の建物だ。慈慶殿は宝物第809号に指定されている。



慈慶殿一帯は南向きの慈慶殿を中心に西北側に福安堂を、東側に清謙樓と協慶堂を連結した複合建物群だ。福安堂はオンドルを設置して冬期用の寝殿として、清燕樓は板の間を設置して夏期用の空間として使用した。西側の石壙は福や長生きを祈願する模様などで飾った。また、裏側の石壙には母君の長寿を祈る十長生煙突を設置した。



十長生煙突(宝物第810号) 慈慶殿にはオンドル部屋をたくさん作ったが、各部屋と連結した10の煙突を集めて、北側の石壙に一つの大きい煙突を作った。地下に煙の道がつながっているのだ。煙突壁面の中央に長寿を象徴する10種類のものを飾り、上下には鶴とブルガサリ(火と鉄を食べるという想像の動物)などを配置して、悪鬼を阻んで長寿を祈る意味を込めた。煙突の機能に充実しながら造形美に富んでおり、朝鮮時代宮廷煙突の中で最もすぐれていると評価されている。



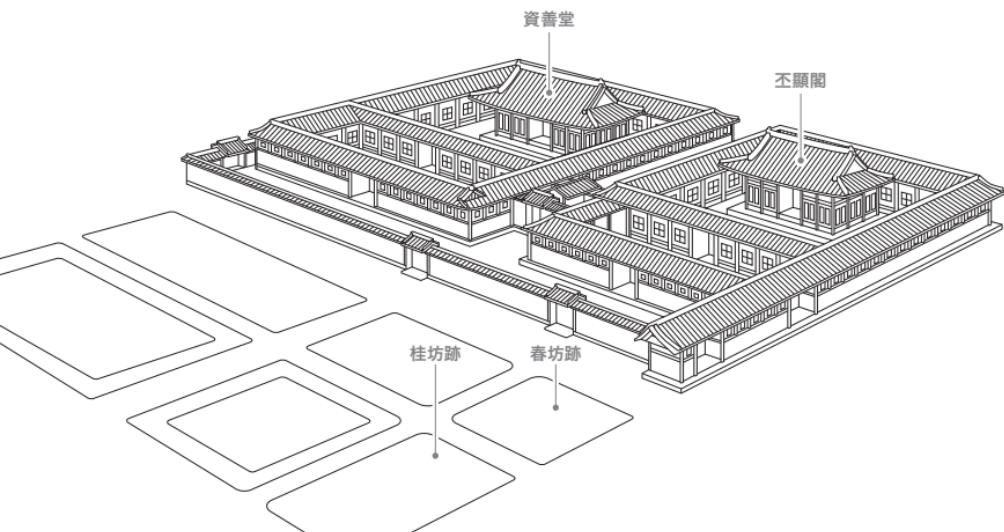
高宗を即位させた神貞王後の力 神貞王后は夫(孝明世子)が22歳で夭折し、息子の憲宗(24代目の王)が即位して王大妃となった。憲宗が後継ぎのないまま世を去ると、安東金氏の勢力は哲宗(25代目の王)を即位させて、神貞王后的力を弱化させた。安東金氏の力に押されて王権をまともに発揮することができなかつた哲宗は、徐々に国事をないがしろにし、33歳の若さで世を去る。仁祖(16代目の王)の8代子孫であった興宣君は、父(南延君)が思悼世子(22代目の王の父君)の息子である恩信君の養子に入ることで英祖(21代目の王)の血統を引き継いでいた。このような理由から、神貞王后は哲宗が後継ぎのないまま崩御すると興宣君の次男を養子にして即位させた。この時、高宗が12歳だったので10年間垂簾の政をして政局を主導した。

7 東宮一帯

東宮

浮び上がる太陽、王世子の居所

王世子は昇る太陽のように王位を継ぐ人であるため、内殿の東側に居所を配置して、これを東宮と呼んだ。西側の資善堂は王世子と世子嬢が暮らした内殿で、東側の丕顯閣は勉強をしながら政務も担当していた外殿に該当する。南側の春坊の跡には王世子の教育を担当した侍講院が、桂坊の跡には儀典と警護を担当した翊衛司が、その周りには部属官庁があった。朝鮮初期には東宮が宮廷の外にあり、宮廷内に東宮殿として資善堂を作り始めたのは1427年(世宗9年)だ。文禄の役の時に全焼して1867年に再建される。日本が朝鮮物産共進会開催を控えて博覧会を開くという口実で、1914年に東宮一帯を完全に撤去した。この建物は1999年に修復したものだ。



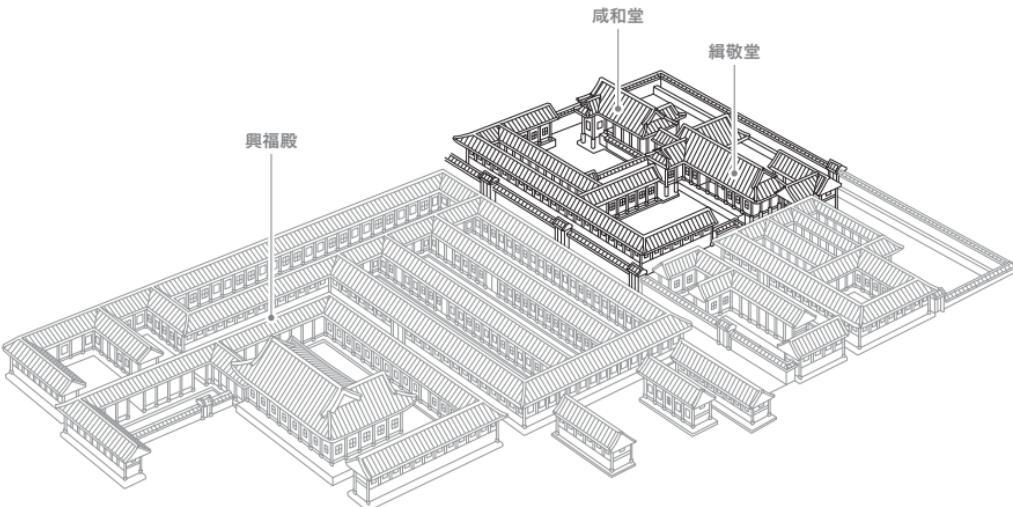
海外旅行をして来た受難の資善堂 資善堂をはじめ、1914年に撤去された景福宮の多くの殿閣は日本人に売られていくようになった。資善堂は景福宮撤去に先頭を切ったオークラが持ち出して、自分の家の庭園に移した後、「朝鮮館」と名付けて私設博物館として使用した。1923年関東大震災で、この建物は焼失し基壇と礎だけが残った。オークラホテルの庭園に放置されていた基壇部の石などを、1993年 金晶東教授が見つけた。その後、協議の末、景福宮に戻すことができた。火災により既に傷んでしまった石は資善堂復元の時に使用できず、鹿山に置かれている。

8 咸和堂と緝敬堂

咸和堂・緝敬堂

後宮と宮女たちの空間

交泰殿の北側にあるアミ山の向こうには、興福殿一帯が位置していたが、この一帯は後宮と宮女たちのための後宮領域だ。寝殿として使われた幾多の殿閣と複雑な行閣は殆んど無くなり、現在は咸和堂と緝敬堂だけが残っている。これは、日本が朝鮮総督府博物館を運営し、その事務室として使うために壊さなかつたからだ。今は無くなつた興福殿は後宮領域で、中宮殿である交泰殿に似た所だが、格を一段階低くして作つた。ところが、神貞王后がこの興福殿で崩御したのを見ると、大妃殿としても使われていたことがわかる。咸和堂と緝敬堂は廊下で繋がつており、高宗が乾清宮にとまる当時、ここで外国使臣を接見したという記録が残つている。



受多門と宮女たちの望み　興福殿の西には受多門があった。受多門は王から愛されたかった後宮と宮女たちの望みをそのまま反映するかのように'たくさん受ける'と言う意味が込められている。王から承恩を受けた宮女はチマ(スカート)を裏返しに着てそれを表示し、その後は通常の宮女たちとは違う待遇を受けた。しかし、一夜の承恩ですぐに後宮になるのではない。後宮になった後も毎日、王のお呼びを待ちながら心を焦がした女性たちに、'受多門'という名前が特別に感じられたのは当然のことだ。

9 香遠亭と乾清宮

香遠亭・乾清宮

高宗のために建てた空間

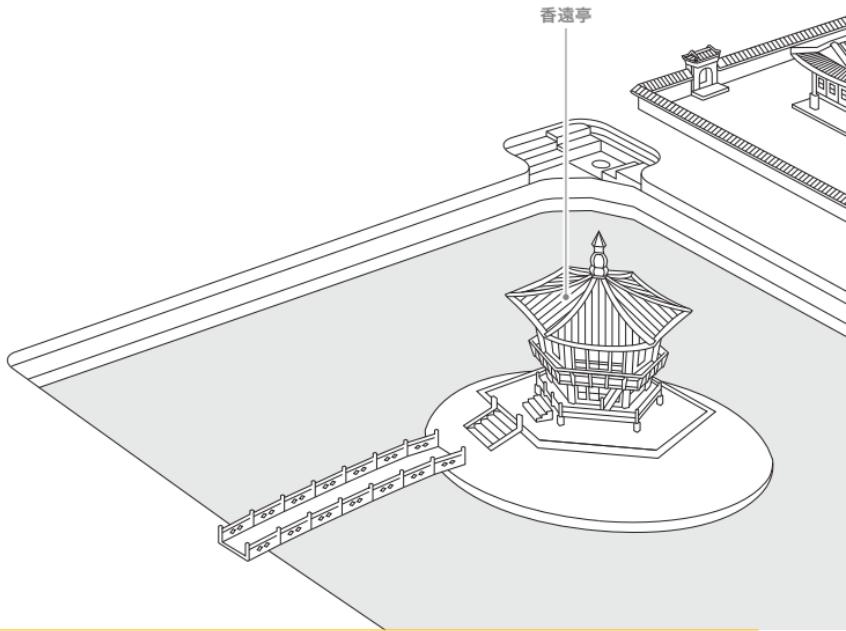
咸和堂と緝敬堂の北側の後園領域には香遠池という四角い池が造成されており、その中に香遠亭がある。慶会樓が雄大壮厳で男性的なら香遠亭はこぢんまりして女性的な雰囲気を漂わせている。元々は北側の乾清宮につながる橋があったが、朝鮮戦争の時に破壊され今のように南側においていた。香遠亭(宝物第1761号)は世祖(7代目の王)の時に建てた翠露亭跡に乾清宮を建てる時に造成したもので、香遠亭の北側に乾清宮が位置している。高宗は1873年(高宗10年)に実父(興宣大院君)の政治的干渉から脱して親政体制を構築しながら、政治的自立の一環として乾清宮を建てたそうだ。

乾清宮は王妃の居所である坤寧閣、王の居所である長安堂、洋館である觀文閣などから成り立ち、1895年に明成皇后が殺害された悲劇の場所でもある。1900年代の初期に取り払われた後、1939年にはここに美術館が建てられ、1945年独立以後(戦後)は民俗博物館として使用されていた。2007年に觀文閣を除いた殿閣を復元した。





明成皇后の悲劇　日清戦争で勝利した日本は、本格的に朝鮮に対する内政干渉を始める。ここに親露政策を立てて日本に正面から対立した明成皇后は、乾清宮で残酷な死になる。1895年(乙未年)10月8日(旧暦8月20日)、日本公使館の職員・日本軍などが乾清宮に乱入して明成皇后を刺し殺し、その遺体は鹿山で燃やしてしまった。これが明成皇后弑害事件、いわゆる『乙未事変』だ。

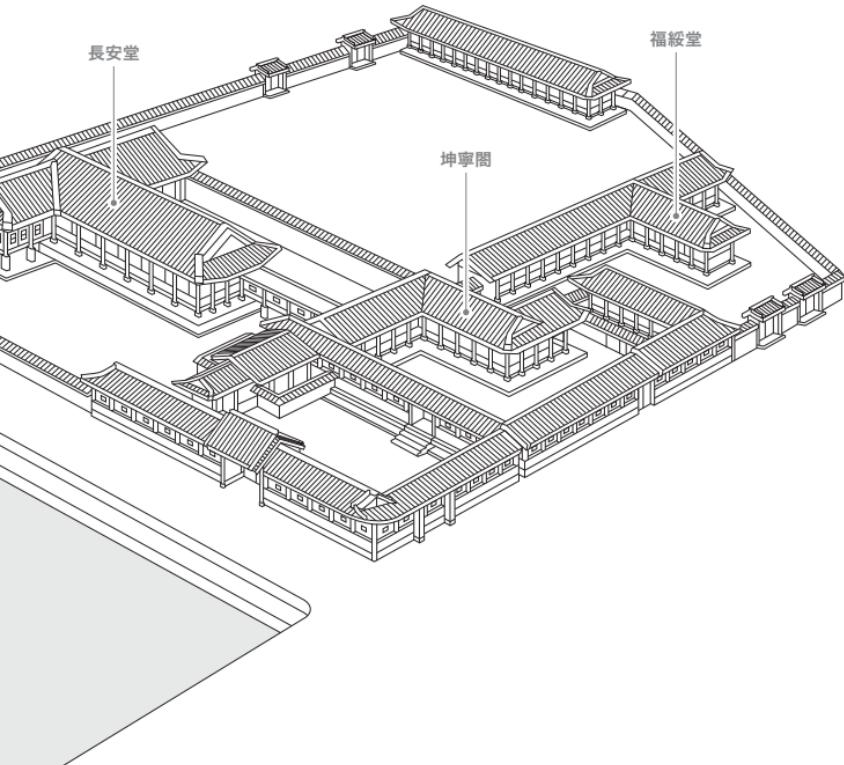


観文閣跡と電気の発祥地　高宗は新しい文物に関心が高かった。1887年に高宗は、香遠池の北側に最初の発電所を建て、乾清宮の夜を明るくした。遠香池の水を利用したことから、最初は電気のことを‘水火’と呼んだと言う。当時、電気の導入はエジソン電気会社を通じて行われたが、これは東アジア初のことだった。その頃、エジソンの日記には、このように記録されていたという。「本当に、東洋の神秘な王宮に私の発明した電燈がつくんで…夢のようだ!」観文閣は元々伝統的な木造建物だったが、1891年にロシア人の建築家サバチンが設計し、洋式3階建てとして建てられた。



済上眞源泉

乾清宮での最後の夜と俄館播遷 景福宮の殿閣のうち‘宮’という名前を持つのは乾清宮が唯一だ。乾清宮は高宗のためのもう一つの宮廷だったわけだ。しかし、高宗が乾清宮で生活したのは約10年間だけだった。乙未事変後、高宗は常に身近の脅威を感じながら過ごさなければならなかつた。日本が掌握している景福宮から脱するために、アメリカ公使館に移ろうとしたが失敗した。その後、1896年2月11日の夜明けに高宗は皇太子と景福宮を脱出してロシア公使館に向かった。これを『俄館播遷』という。俄館播遷以後、朝鮮王朝は再び景福宮に戻ることができなかつた。



青瓦台となった景福宮後園 神武門の北側の景福宮後園領域には、隆文堂・隆武堂・玉蓮亭・慶農斎と王が直接農作業の体験をしていた内農園、王が軍事訓練を点検することができる景武台など、多くの建物があったが朝鮮総督官邸を建てるため取り壊されてしまった。景福宮の後園領域が景福宮から離れた時点だ。総督官邸は米軍政期には軍政長官の官邸として、その後は大統領官邸として使用していた。1960年に『青瓦台』と改称した。

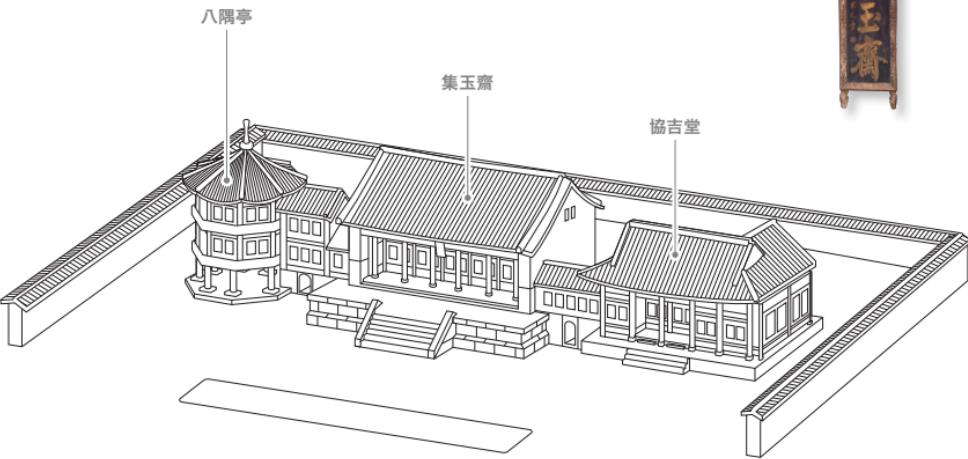
10 集玉齋一帯

集玉齋

清風と朝鮮風の調和

1876年、景福宮に大火災が起ると高宗は昌徳宮に移り、1885年に再び景福宮に戻って主に乾清宮で過ごした。この時、昌徳宮の咸寧殿の別堂であった集玉齋と協吉堂などを1891年、乾清宮の西側に移し、書斎や外国使臣接見所として使用した。集玉齋は煙瓦を積んで両壁面を作った清風建物で、外から見ると単層に見えるが、内部は2階になっている。八隅亭は八角楼閣で柱の上部に清風の華やかな飾りをつけた。一方、協吉堂は固有の朝鮮式建物で、オンドル部屋を置いて休息場所として使用した。これらの建物は廊下で繋がれしており、それぞれの特色を持ちながらも絶妙に調和を成している。

集玉齋の懸板



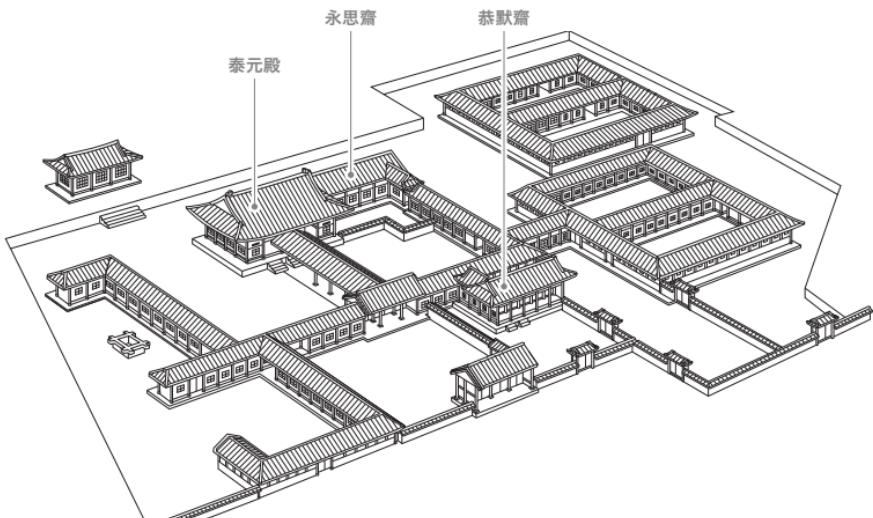
清風建築 1880年までは清が殆んど唯一の先進文物の輸入窓口だった。この影響で、集玉齋と八隅亭をはじめ、昌徳宮の延慶堂にある善香閣、興宣大院君の別荘である石坡亭も清風(中国式)に建てられた。華麗な装飾と立体的な空間、煙瓦のような新しい材料使用などが清風建築の魅力だった。

11 泰元殿一帯

泰元殿

王位正統性確保のための高宗の努力

王子出身ではなかった高宗は、父親(興宣大院君)とともに王権承継の正統性是非に対応しなければならなかつた。その一環として泰元殿を作り、歴代王の肖像であるご真影を奉ることで正統性を確保しようとした。1868年(高宗5年)に建立されたと推定される泰元殿には太祖(1代目の王)のご真影を奉った。以降、皇后の遺体を奉る殯殿として使用したりした。文慶殿は位牌を奉る魂殿として建立した。周辺に恭默齋、永思齋などの儀礼用建物もあり、神聖な一郭を成したが、日本の植民地時代に撤去された。ここは青瓦台が近いという理由からか、1961年5.16クーデター以後、青瓦台の警護部隊が立ち入り、1979年、いわゆる‘景福宮謀議’をした所でもある。2006年に現在の姿に復元された。



王室の葬礼 王が崩御すると、5日間魂が戻って来るのを待ってから王世子が即位し、王の遺体は棺に入れて殯殿に安置する。国葬は5ヶ月だが、この期間が過ぎると王陵(御陵)に棺を移して埋め、王の魂を入れた位牌を魂殿に安置して三年の喪を行う。1年経つと、最初の祭祀である小祥を、2周忌には大祥を行い、その2ヶ月後には禫祭を執り行なって三年の喪を終える。

12 慶會樓

慶會樓

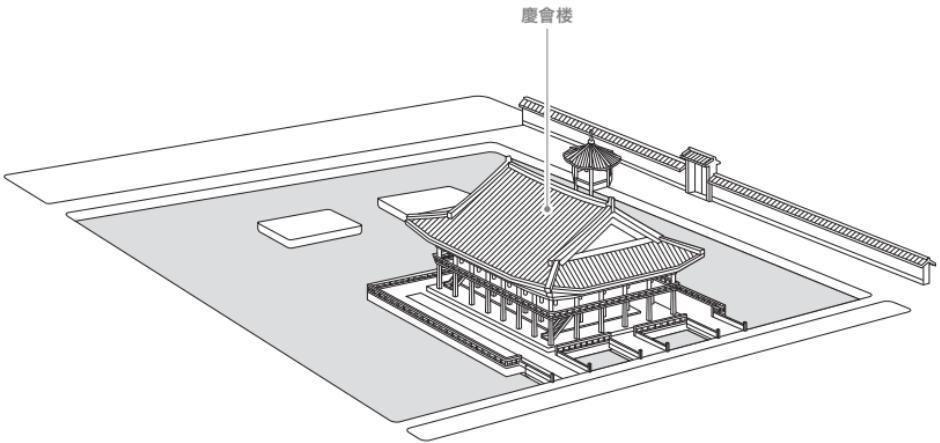
雄大壯嚴ながらも美しい建築美学の絶頂

慶會樓は王が臣下たちと規模の大きい宴会を開いたり、外国使臣を応待していた所だ。池で舟遊びを楽しんで慶會樓に上がり、仁王山と宮廷の景観を鑑賞した。創建当時、小さな楼閣だった慶會樓は1412年(太宗12年)に池を大きく確張して楼閣も大きな規模に再建した。文祿の役で焼失したのを1867年に再建した。慶會樓は正面7間、側面5間の重層で、広さ931m²の大規模の木造建物だ。1階は48の高い石柱だけを立て、2階に床を敷いて宴会場として利用した。床底は3段のうち中心部分が最も高くて、その次の12間と外側の20間はそれ一指尺ぐらい低くなっている。中央に行くほど高い位階の官僚たちが座った。慶會樓は周易の原理に基づいて建てたという昔の記録がある。





これによると、中央の3間は天地人を、12間は1年十二ヶ月を、20間外側にある24個の柱は24節気を意味する。すみむね(隅棟)には韓国の建物の中で最も多い11個の雜像(屋根の上の四隅にさまざまな神像を刻み入れた装飾瓦)がある。再建当時に青銅で作った二つの竜の像を池に入れて、水と火を治めるようにしたという。1997年浚渫工事の際出土され国立古宮博物館に展示している。慶会楼は韓国の国宝第224号に指定されている。



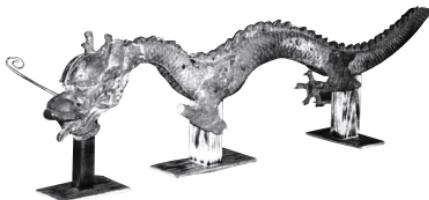
石塀で取り囲まれていた慶会樓　日本の植民地時代に破壊される前まで慶会樓のまわりには、四方を取り囲んだ石塀と東・西・南門があった。ここは大臣であっても勝手に入ってはいけなかった場所だ。世宗の時、教書館に勤めていた丘徳直という者が宿直をしていたある夜、慶会樓に密かに忍び込んで景色を楽しんでいるところを王とでくわすようになった。彼が慶会樓を見物したくて微官の身分で罪を犯したと告げると、世宗は風流の分かる者だと思い、詩をうたって見ろと言った。<春秋>までうたわせた王は翌日、丘徳直を呼んで正9品であった彼を従5品にした。

フンチョンマンチョン (ふんだんにという意味の韓国語) の起源　燕山君(10代目の王)は朝鮮の美しい女性を選抜して‘ウンビョン(運平)’という芸者にしたが、その中から宮廷に選ばれて来た芸者を‘フンチョン(興清)’といった。燕山君は慶会樓などでフンチョンたちと共に遊興を楽しんだ。この理由もあって燕山君は臣下たちによって廢位された。ここから興じて楽しむとか、お金をでたらめに使う姿を称える‘フンチョンマンチョン’という言葉が由来したそうだ。

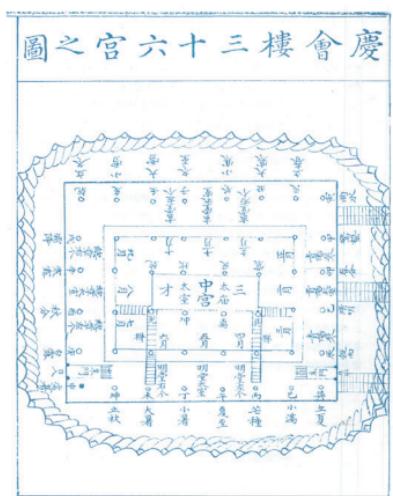
慶会樓とチマ岩の伝説 慶会樓の2階の樓閣に上ると、東の駱山、西の仁王山、北の北岳山まで一望できる。中宗は反正に成功した後、燕山君と関係した妻の実家であったため、王妃のシン氏を廃位させなければならなかった。しかし、10年近くともにした情を忘れることができず、時折、慶会樓に上って仁王山の麓にあるシン氏の家の眺めたりした。このうわさを聞いたシン氏は、慶会樓から中宗が眺める時、目によくつくように宮廷で着ていた桃色のチマを仁王山の岩に広げておいた。中宗が岩に置かれたチマを眺めながらシン氏に会いたい心を和らげたというチマ岩の伝説が慶会樓と関連して伝えられている。

悲運の端宗と慶会樓 1453年(癸酉靖難)以後、首陽大君(後で世祖になる)が朝廷を掌握し、自分の弟である錦城大君と宮人・臣下たちまで流罪に処すると、危険を感じた端宗(6代目の王)は王位を譲り渡す。端宗が首陽大君に譲位しながら玉璽を渡した所がまさに慶会樓だ。これに憤慨した朴彭年が、慶会樓の池に飛び込んで自殺しようとすると、成三問が後の機会を待とうと引き止めたという。彼らは世祖(7代目の王)即位後、端宗復位を企てて失敗し、景福宮思政殿の前庭で王の尋問を受けて結局は死刑に処され死六臣となった。

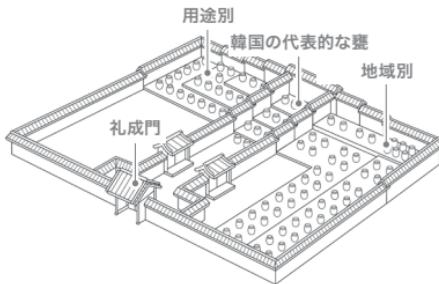
慶会樓全図のうち36宮地図



出土された青銅竜



醤庫 景福宮には味噌・醤油などを保管する大きな醤庫—甕(容器)の置き場が二か所あった。2005年に咸和堂の西側の醤庫を発掘調査などに基づいて復元した。傾斜地を活用して階段式に作った甕の置き場が見える。2007年に韓国全国から集めた様々な甕を用途別・地域別に分類している。甕のサイズによって醤油類(大)・塩辛類(中)・みそ類(小)を入れていた。



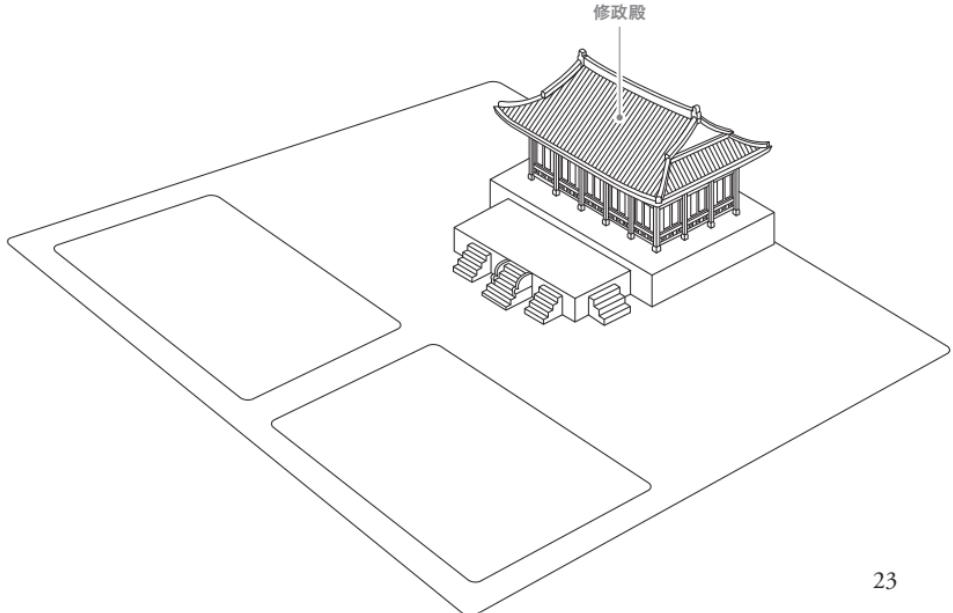
13

修政殿と闕内各司

修政殿・闕内各司

王室業務のための官庁

光化門前の六曹通りにあった官庁を‘闕外各司’といい、宮廷に入っている官庁は‘闕内各司’と呼んだ。勤政殿の西側に位置した闕内各司は、大きく四つの部分に分けることができる。承政院、弘文官、芸文館、教書館などは王を近くで補佐する政治行政機構だった。内班院、尚書院、尚衣院、司匱院、司僕寺などは王室の生活と活動を補佐した実務官署だった。欽敬閣、報漏閣、観象監、簡儀台などは天文と時刻を観測する科学部署で、都總府、内兵曹、宣伝官庁、忠壯衛などは宮廷守備と王室警護を受けた軍事部署だった。このうち、修政殿だけが現在唯一残っている。1867年に再建されたここは、王の出入りが頻繁で官庁建物としては珍しく正面に月台を置いた。修政殿は執務空間として使用していたが、1894年甲午改革の時、内閣本部である軍國機務処として使用されたりした。闕内各司は修政殿の前の空き地に密集していたが、1915年朝鮮物産共進会を開催時に完全に撤去された。ここは世宗の時(1443年)、ハングル創製の産室である集賢殿があった所でもある。修政殿は宝物第1760号に指定されている。





発行



2011